



古川 秀明 新連載

シンガーソング・カウンセラー

日曜寺子屋家族塾・塾長

プロフィールはHP (tatant.net) をご覧下さい。

「どうして勉強しなければならないのか？」と言う子どもの素朴な疑問に向き合いました。そしたら日曜寺子屋家族塾という形になりました。

どうしてそうなったのか、また参加した家族や講師にどんな変化が起きているのかを報告します。日本中に日曜寺子屋家族塾が広まることを願いながら。

大川 聡子

ちょうど昨年の今頃は博士論文が佳境の時期でしたので、2月、3月の季節のニュースを聞いたり、マガジンの原稿を書くために論文を読んでいると、執筆していた当時のことを思い出します。常に何か書いていないと書けなくなる、自転車操業のような感じでした。思えばちょうど10年前の修士論文提出時も院生共同研究室は大騒ぎで、「だれか修論提出間際のエスノグラフィーとか書けばいいのに」「だれか書くんだよ！」と冗談交じりに言う声を遠くで聞きながら、皆ひたすら自分の論文に

向き合っていました。自分は今後何かを修了することがあるのかな、と思いながら、子どもの入園・入学準備にいそしんでいます。

浅田 英輔

電腦援助、2回目です。続けることをがんばっていきます。世の中の携帯電話事情はスマートフォン一色ですね。「ガラケー」を使いたい人は選択肢がほとんどないそうですね。多様性と没個性が同居しているようなのが日本の文化なんだなあと思います。スマートフォン自体は多様性が売りなのですが、みんながみんなスマートフォンを使うという没個性、みたいな感じですね。入庁したころ、大先輩がパソコンの前に座って「コレ、どうすんだ？」って言っていて「何したいんですか？」って聞くと「わがんね」って言っていたのを思い出しました。使い方はわかるけど使い道がわからない、とはならないようにしようと思います。私は特に「その道具をどう使えば楽しいか」ばっかり考えて周辺機器が増えていくので気をつけます。

大谷 多加志

3月で、今の仕事を始めてちょうど10年になります。できるようになったこともあり、実感としては相変わらずできないこと、の方たくさん目につきます。

一方で、やるようになったこと、は確実に増えました。このマガジンでの連載、編集員という役もその1つです。やらなくなったことももちろんあるが、どちらかという、やらないでもいいようなことをやらなくなった、と思う。3か月ごとに訪れる執筆と編集の作業は、日々自分がやっていることを見つめ直す貴重な機会になっています。日頃思っているが、言葉にできていないことを、じっくり形にしていく。そんな風に、連載を続けていくことができればと思います。

岡田 隆介

散歩中のこと、目の前に小さな花が目にとまる。「こんな所に誰かが植えたの

かな？自生の野草にしてはちょっと垢抜けしているが…。周囲を見ても、人の手が加わっている様子はない。じゃあ飽きて捨てられて繁殖した野良花？」。

次いで、過去の記憶を参照する。「なんか似た花があったような…。名前、思い出せない。スマホで写真撮っておいて、後でネットで調べてみよう。カランコエにちょっと似てるけど、葉の厚みが違うな」。

そして連想。「そういうば、いつかいろんな色のカランコエを集めたけど、どこにいったんだろ。関心が薄れたら花も消えた。自分も、けっこう惨いことをしてるんだ」。

ここで、未来に飛ぶ。「そうだ、週末は久しぶりに花屋に行ってみよう。いや、それとも寒肥えをやるかな。おっと、もう30分たった。そろそろ引返そう」。

身体がひたすら歩く間、こころはいま～過去～未来～いまを散歩する。

竹中 尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

今年の冬は厳しい寒さでした。そのせいかもかもしれませんが、ご高齢の方のお葬式が続きました。その多くの方が百才前後という世代でした。よく高齢の方のお葬式の時に、大往生という言葉が聞こえます。よく一口に大往生と言う言葉でくっつてしまいがちですが、そこにはそれぞれの人生があります。■先月に99才で亡くなったおばあちゃんのことです。10年ほど前です。お参りをして、町内に同世代の人がいなくなってしまったと聞きました。そのおばあちゃんは一人暮らしで、町内からは「あそこだけは、まだ昭和時代だ」と言われていました。生活スタイルの違いもあって、近所とは上手につきあえていませんでした。しかし、「私は話し相手に不自由はしてない」と言います。おばあちゃんは、朝に弁当を二つ作って、少し歩いたところにある公園に通っていました。弁当の一つをホームレスにあげて、ホームレスと会話を楽しんでいました。■人生を送るには、いろんな知恵があるなあと思います。老人にもいろんな生き方があるなあと思います。老人の生活と一括りで見ては、

気付かない生き方がかなりあります。

川崎 二三彦

いよいよ破綻？

私がごく近い関係にある人物を、仮に W と呼ぶことにしよう。この3月末、Wは約40年も勤めた会社を定年退職することになっていた。

「有り余っている有給休暇を少しは使いたいな」

「どこか旅行に行きたいわ」

こんなことを言うので、私は安請け合いで「いいんじゃない」などと応じていたのだが、会社が急に、3月1日から退職制度を変更すると言い出した。

「どういうことなんだ」

「会社の説明では、3月1日以降に退職する場合は退職金を切り下げるといふの。平均140万円も減額されるらしいわ」

「年度途中で言い出すなんて、試合中にルールを変更するようなもんじゃないか」

などと返事してみたものの会社が譲るはずもなく、Wはやむなく予定を早めて2月末に退職することにした。とはいえ職場の同僚たちには迷惑をかけられないので、3月は給料半減の臨時職員としてフルタイムで働くことになった。



「じゃあ、旅行は2月だな」

というわけで申し訳程度に休暇を1日取得するだけのプランを立てて出かけたのが宮崎。ここは彼の石井十次が生まれたゆかりの地なのである。まずはこっこの都合を優先して石井十次記念資料館を訪ねたが、以後はWの希望に合わせて適当にあちこちを巡った。そして、3日間の日程終了後、予定どおり西へ東へと別れて帰路についたのであった。

*

それはさておき、私が2月に足を踏み入れた都道府県市を列挙すると、この宮崎をはじめとして



京都、横浜に加え、静岡、茨城、神奈川、岡山、北海道、東京、千葉、埼玉。あちこち移動している間に、あれやこれやで次第に追い詰められてしまった。

一つは、それぞれテーマの違う研修講師の依頼が重なり、準備に追われたからだ。ちなみにテーマを並べてみると、「虐待のリスク評価」「スーパービジョンの展開」「児童相談所とは」「児童虐待の理解と対応」「困難な保護者への対応」「虐待死亡事例の検証」のようになる。

「なんだ、似たようなものじゃないか」と思われる方もあるだろうが、狭い世界で生きている私にとっては、これでも準備する内容が違う上、つついパワーポイントで遊んでしまうので、膨大な時間を費消してしまうことになる。おまけに2月末は、多忙にかまけてやむを得なかったのか、単にサボっていただけなのかはともかく、切をとうに過ぎたあれこれの研究報告書原稿最終デッドラインが押し寄せている。首が回らなくなって、いよいよ破綻しそうだ。(2013/02/25 記)

鶴谷 圭一

7年ほど使用した MacPro のバージョンが古くなって買い替えることになった。問題は今までだましまし使っていたワープロソフト、EGWORD がついに使えなくなったことだ。10年以上前に販売もサポートも終わっていたソフトだったけど使いやすさと Macintosh との相性の良さで使い続けてきた。

マイクロソフトのWord も仕方なく使うが、次はPagesというMac用のマイナーなソフトに切り替えることにした。使い勝手はW

ord より良い。

ほとんどの方にはどうでもいい話で申し訳ないけど、僕にとってはメチャクチャハードワークが待っている。だって、EGWORD で作った文書の数 13,347 個。これをいったんWordに変換してからPagesで開かなくては仕事にならない。おまけにほとんどの書式は乱れてしまっている。花粉とともに憂鬱な季節がしばらく続きそうだ。

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール: osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター: haramachikinder

河岸 由里子

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

12回の連載を終えた。何かを一つ完了すると言う事はとても達成感があって気持ちが良い。内容はまだまだだと反省しきりだが、今までの支援を通じて思う事のまとめとして書いてきた。「我流子育て支援論」などと言う表題を付けたが、「支援論」と言えるほどのものではない。今の時代の子育て支援の現場の記録である。地域の差はあるかもしれないが、全国或いは全世界共通の問題もあると思う。そんなことを少しでも伝えられたら幸いである。次回から又新たな視点での子育て支援を書いて行こうと思う。

中村 周平

私事で大変恐縮ですが、昨年末で大学を出て以来、ずっとお世話になっていた職場を退職することになりました。決して良い辞め方ではありませんでしたし、お互いの考え方や方向性の違いを、お互いに認め合うことができませんでした。一年半もお世話になっておきながら、自分の意志を押し通してしまったことに本当に申し訳なく思っています。

ただ、この一年半の中で様々なことを経験させていただき、自分から何か始めてみたいと思っていたのは、正直な気持ちとしてありました。また、このマガジンに載せていただいている「スポーツ事故」に関係することで、今後考えていきたいこともありました。「何ができるか」だけでなく、何

がしたいか」を、あらためて考える時間を過ごしています。またこの短信を利用して、近況を報告させていただければ幸いです。

北村 真也

私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、府教委認定フリースクール「知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

今、文科省に提出用の小冊子の最終章を書き始めたところです。2 月末の校了予定、もうひと踏ん張りです。私塾に携わる者としては、この時期が最も多忙な時期となります。子どもたちの受験、行政関係の資料作成、そして生徒募集…。そのすべてが 2 月に集中してしまいます。そんな中で今回の原稿は、脱稿しました。「ああ、桜の季節が待ち遠しい」そう思っているのは、私だけでしょうか…?

荒木 晃子

最近、不妊をテーマによくもこれだけ聴き/語り/書き続けることができると、自分でも呆れている。このエネルギーは一体どこから来るのだろうかと考えてみた。確かに以前は、自分の当事者性からくる問題意識が私を駆り立てるのだ!などと、意気込んでいた時期もあったが、いまはそうでもないらしい。しかし、いまだに、不妊という現象に家族が直面したとき、どうやって解決するか/できるかの答えに到達していない。これは、自分自身の未解決事件であり、まだ誰も答えを持たない/見いだせない家族の/社会の問題といえると思う。要は、まだ、私のなかで“もつれている”のだ。もつれた糸を一本一本ひとつひとつ作業を研究に例えると、時間をかけ丁寧に、不妊の先につづく人生を抽出し、整理したのち人生の選択岐路として編みこんでいく作業といいかえることができるかもしれない。その抽出した選択肢は、子どもをあきらめる、養子を迎える、不妊を治療するといった、それぞれに難解な岐路であるかゆえに、容易に整理できないのだろう。子どもの利益を優先し、生殖医療の法整備が完成したのちには、きっと誰もが

選べる人生岐路が社会に用意されるだろうと、いまだに期待し続ける自分がいることは間違いなさそうだ。そう、私はいまも「期待し続けている」のだ。それこそがエネルギーなのかもしれない。



尾上 明代

私は、自分でも呆れるくらい、いろいろな仕事で休みなく飛び回っています。(女性のアルコール・薬物・ギャンブル等の依存症の方々の治療セッションは、私の大事な仕事の一つですが、その彼女たちに「尾上先生はワーカホリック」という「お墨付き」までいただいています。)そんな私の楽しみの一つは、美味しいレストランに行くこと。コンビニおにぎりやバランスを取るためにも、時々ちょっと良いところを狙います。2 月は、少し遅い新年会を 3 回しました。

1 回目は、仲の良い友人と東京・池袋の和食屋さんで、ちょっとずつ珍しいものを沢山いただきました。2 回目は、東京・新宿の「のみや」(店の名前)で、私のトレーニーたちと、いろんなお肉料理をいただきました。ここのご主人は、芝浦の肉の卸市場から、その日の朝に「お肉になった」新鮮なものを直接仕入れてくるとか。焼きも生も、もうおなか一杯と全員が訴える中、最後の締め、私は牛リブアイのステーキ・サンドまで食べて、大満足でした。京都・「はふう」のビーフカツサンドに匹敵、いやそれ以上か…。(私は、見た目よりずっと多く食べる人なんです!) 3 回目は東京・飯田橋のカナル・カフェに仕事仲間と行きました。一度行ってみたかった知人ぞ知る、神楽坂近くのお堀にあるイタリアン・レストランです。ポート乗り場が隠れ家的。ある漫画で、その船着場のテーブルで食事していると、ポートに乗ってアリアを歌うプレゼントが贈られる、なんていう

場面になったところ。外国のような雰囲気、去年仕事で行ったニューヨークの波止場のレストランにそっくりでした。夜のお堀のライトアップも、ちょっとクリスマスみたいで素敵です。ハードでインテンシブな仕事は何日も続き、無事終わったあとだっただけに、本当に幸せな時間でした。こういう時間が、忙しい私を支えてくれているんだなあ、としみじみ思います!

木村 晃子

10年前、私は33歳でした。准看護師として病院に勤務していた頃で、経験年数とそれにプラスしての通信制の教育を受けることで、正看護師への受験資格が得られるという情報が出始めたころでした。この先、看護師として勤めていくのであれば、当然正看護師の資格を手に入れたほうが良いなど考え、その道に進む準備を始めていました。

同じ頃、63歳だった父の要介護状態が悪化しました。母から、「一人で見るのは大変。介護のサービスを使おうと思っている。」と言われました。私は、介護保険のことはよく理解していませんでした。父が介護サービスを利用するのなら、少し勉強をしておこう、どうせ勉強するのなら、ケアマネジャーの資格もとってしまおう。試験勉強をしながら、その仕事内容に魅了され、合格したらケアマネジャーになろうと新たな野望を持ったのもその時です。運よく試験に合格し、ケアマネジャーになることができました。勤め人として始めたケアマネ業務も、思うところがあって予定を大幅に短縮し、わずか半年の勤務を経て当別町で独立開業。この3月末に8年がたちます。

一人事業所ですが、地域の関係者や住民の方々に支えられて楽しく仕事できていました。私の仕事はこんな風に続いていくものだと思っていました。

ところが、この私の予想は大きく外れ、この3月末をもって、自分の事業所を廃止することとなりました。ご縁があって、これまで同じ地域で活動してきた法人へ、勤務を移動することになりました。これまで通り、ケアマネジャーとしての仕事内容は

変わりありません。でも、共に同じ職場で働く仲間ができます。自由気ままにやってきた8年間から、勤務スタイルが変わることへの多少の不安はありますが、きっと頑張れると思います。

10年前に想像していなかった今が、私の目の前に広がっています。与えられた道を歩んで行きたいと思います。10年後の自分を楽しみにしながら。

* 当別町でケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

団遊

私が育った家は、それほど来客が多い家ではありませんでした。母親が来客が得意ではなかったのだと思います。だから、大人になって自分に家族ができた後も、なんとなく来客があると聞くと億劫でした。

ところが、息子が入った保育園が、保護者の協力を強く要請する保育園だったため、預かり合いも含め、「今日のうち」「次回はそこで」と、毎週末のように、誰かがいるようになりました。子どもだけが来るわけではありません。「おつかれー」と言って家族ぐるみで来るのです。作業を一緒にして、食事と一緒に摂る。もちろんこちらも行きますが、来られるのが苦手な人は、行くのも苦手なものです。私はそうでした。ところが最近、この苦手がなくなりました。誰の家に行っても、まるで自宅のように過ごせるのです。慣れとはスゴイもので、週末に誰も来ないと、「誰かを呼びたい」とココロが叫ぶくらいです。この勢いだと、躊躇なくハグとフレンチキスができる日も、そう遠くないのかもしれない。変わるものですヨ、人間って。

藤 信子

昨年の秋ごろから、疲れがでたのか久しぶりに熱を出したり、10 数年ぶりにアトピーが出たりした。去年の夏は長距離移動が多かったのもあり、仕事の疲れがたまっているのだと諦めて、積極的な治療を求めず、悪化しないようにと気をつけるだけにした。2ヶ月を過ぎるころから、回復の様子が見られると、日に日に楽になっていくようだった。この治る過程というものを

体験するうちに、日頃面接しているクライアントのよくなり方を思い出した。すごくしんどいなと思いつつも過ごしているうちに、ある日、あれっという転回点があるような感じ。こういう感じは大事に覚えていたいと思っている。



水野 スウ

今回の原稿のおしまいあたりに、クッキングハウスの活動 25 周年記念コンサートのことを書きましたが、当日は、私も舞台にあがらせてもらって、ひとことお祝いスピーチを。

「クッキングハウスは不思議なレストランであると同時に、実は、あんしん貯金の銀行でもあるのです。そのままのあなたでいいよ、の言葉が行き交うレストランでいつも感じる安心感は、松浦さんやメンバーやスタッフ、それにお客様も一緒になって、みんなで大切に育ててきたもの。そのあんしん貯金は、引きだしても減らずにまた貯まっていく、実に不思議な銀行です。

クッキングハウスはまた、生きることを学ぶための、いのちの学校です。入試もなく、誰でもいつからでも生徒になれるので、私も生徒の一人になって約 15 年、メンタルヘルスやきもちのいいコミュニケーションのとり方について、メンバーさんとともに楽しく学んできました。学んだら、それをレポートに書いて出すのが生徒のつとめ。というわけで、クッキングハウスから学んだこととその実践を、新しく書いたこの本の中にいっぱい収めましたよ

そう言って、紅茶の時間の新刊、発行日もコンサートの日に合わせた『紅茶なきもち』を、晴れの舞台で松浦さんにプレゼン

トしました。

というわけで、本の紹介をここにも少し。『紅茶なきもち〜コミュニケーションを巡る物語』

著：水野スウ 編集・装丁：mai works
発行元：mai works 四六版（127mm × 188mm）200 ページ ¥1,200（税込）

一般の本やさんには並ばない、産地直送の本です。ちなみに、送料は一冊につき、160円。もしご希望の方、いらっやいましたら、sue-miz@nifty.com までどうかご連絡くださいませ。

山本 菜穂子

これを書いている2月24日（日）、津軽はまさに豪雪地帯と呼ぶにふさわしい状態になっています。ここに嫁いできてから20年を超えますが、こんなにすごい吹雪に見舞われたのは初めて！と思います。「夜の吹雪の中の車の運転は、宇宙の中を一人で浮遊している様な感覚でとっても幻想的で好き！」と昨日話していたら、今朝は、1m先の車のテールランプも見えなくなる吹雪の中で1時間近く、命の危険を感じながらの運転を余儀なくされ。みんなからは「菜穂子さんが好きだと言うから神様が吹雪にしたに違いない。菜穂子さんは神様に愛されている。」とからかわれ。

そう、今日はできるだけ外出を控えて、と言われる中、運転して出かけたのには訳があります。昨日今日と2日間は、「家族造形法の深度」を執筆していらっやる早樫先生に青森でWSをお願いし、青森県内を中心に秋田、岩手から御参加の対人援助職の皆さんと「家族造形法」を学んでいたのです。参加者がこんなに目を輝かせて楽しそうな研修会って珍しいんじゃない、というのがそここで聞かれた声でした。早樫先生に感謝です。皆さんも是非、家族造形法を体験してください。「これ、使える！」と言って帰った人たちの多いこと！

そして私は、仕事で忙殺される中でしたが、やって良かった〜と、心地よい疲労感と共に思いつつ、締切ギリギリのスケジュールでこの原稿を書いているという訳です。

春までもう少しかな～。

早樫 一男

1月の末から、私の母親の介護問題が急浮上しています。いずれは…と予想していたものの、突然、対応する必要がでてきたため、慌ただしい毎日を送っています。

この間、地域包括支援センターへの相談、介護認定の手続きや聴き取り調査（訪問）など、高齢者を抱える一家族として、切実な問題として考えることが多々あります。

ところで、月刊の「ケアマネジャー」（中央法規出版）に「家族造形法を使った事例検討会」が2013年2月号から取り上げられています（数回、連載予定です）。関心がある方は購読ください。

我が家で遭遇していることと、「ケアマネジャー」誌への連載との不思議な出会いに驚いている昨今です。

西川 友里

いくつかの学校で、福祉系対人援助職の養成にたずさわっています。

2年前から、専任校の社会福祉士の国家試験受験者用に、メールマガジンを配信する仕事を担当しています。フェイスブックもツイッターもLineもなんだかよくわかっていない私。とりあえずメールマガジンは無料で作れるものらしいから、それを使ってやってみようか、と恐る恐るはじめたメルマガです。今年は70名強の方が登録してくださいました。

国家試験は1月末。試験終了数日後には、メールマガジンを閉鎖する予定でした。そのように告知もしていました。ところが試験日直後、「難しかった」「結果が不安で眠れない」「これから、どうしていいかわからない」というメンバー数名からの投稿がありました。今年の試験は難しかったこともあり、なんだか不安な方が多い様子。「よっしゃわかった、それなら色々な思いの共有の場にしよう！」と、メールマガジンの閉鎖を2週間延期します、と告知しました。

するとどうでしょう、それまでメールを投稿するのは常連の方数名のみだったので

すが、突然投稿者が増え始め、皆さん色々な思いを語り始めました。受験に対する思い、結果への絶望感、それに対するフォロー、それぞれの心の整理、自分の勉強方法の紹介、自分の人生における社会福祉とは…最終的には20名ほどの方が投稿してくださいました。

最後には皆、「どんな結果であれ受け止めて、それからどうするか、皆それぞれが前向きに考えられる日々が来ますように」という論調になっていきました。

「何だこりゃ…！まるでグループワークの、終結場面のようにじゃないの。ネット上のコミュニケーションってよく解らないけど、こんなことも起こるんだな。ネット上でも、やっぱり人付き合いだから、こういう活動を終わるときにはちゃんと終結に向けての活動が要るんだな。人が集まると、ホント何が起こるかわかんないな。すごいな、めっちゃ面白い。」

このメルマガに関わった様々な人が、予想をはるかに上回る経験を経て、2月15日にメールマガジンは閉鎖の日を迎えました。

なんだか大きな勉強をした、不思議な2週間でした。



中島 弘美

大阪で個人開業しているCONカウンセリングオフィス中島の中島弘美です。オフィスでは家族カウンセリングを中心に、子どもとその家族の支援をしています。

私が新卒でファミリーセラピストの仕事をはじめたころは、いわゆるバブルの時代でした。さぞかしボーナスをたくさんもらったのだらうと思われるかもしれませんが、待遇面などで景気のおよさを実感したことはありませんでした。バブルとは無縁の職種でした。

対人支援の仕事をしていると、心理、教育、医療、社会福祉などについては身近な話題だと感じますが、経済や景気の話には疎いと思います。ただ、相談に来られる方の会社が不況で売上げが落ちていることや、アジア圏への転勤、早期希望退職者制度や合併、給料の減額などの話題は多く、クライアントさんの話から景気、不景気による影響を具体的に教わっているようなところがあります。

家族カウンセリングを専門としていますが、サラリーマン、サラリーウーマンの個人面接もおこなっています。社会人の方の来所は、問題を抱えてからの相談もありますが、健康維持のために定期的に来所され、職場のことや家族のことをカウンセリングで整理し、今後の見通しをたてるような成長戦略面接もあります。ストレスがたまってうつ状態などにならないように、予防の役割になります。

心のメンテナンスカウンセリング—もつと広まる必要があると思うのですが、いかがでしょうか。

千葉 晃央

■ミニ連載：私がしている文章の書き方1■

本もろくに読まなかった私が文章を書いています。私がしている文章の書き方はどんな手順なのかをまとめてみる試みです。刻々とやり方はかわりますけども、自分への確認です。

大きな手順としては

- ①箇条書きでいいことをかく
 - ②丁寧に膨らませて文章にする
 - ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
 - ④接続詞等、つながるように加筆
 - ⑤ですます、であるの判断
 - ⑥音読で確認
 - ⑦黙読でも確認
- 大体この6工程です。

今回は

→①「箇条書きでいいことをかく」

私は大体「怒り」がベースです。そのまま思い浮かぶことを文章にしていきます。思い浮かんだ順にです。私は頭に連想され

るスピードの方がパソコンへの入力スピードよりはやいので単語でもいいのでとにかく羅列です。これが文章の要素になります。

次号②丁寧に膨らませて文章にするに続く！

三野 宏治

散髪が苦手です。散髪されている間中、緊張でかんでしまって全身が「カッチカチ」になりとても疲れるから辛いのです。ですが1年に4.5回は頑張っていきます。ある時学生に「今日もすごい髪型ですね」と言われました。「え？すごいって？どんな感じ？」と聞き返すと「荒々しいというか。いい意味ですよ。ほら、よくコントとかで実験に失敗して爆発した科学者がいるじゃないですかあ？ああいう感じです。いい意味で。」うむむ。そうだったのか。私としては「忌野清志郎ばいかな」とか思っていたのですが、大体「いい意味で」ってなんだ。そんなこと言われても総じて悪口としか取れんぞ。

妻に「今日、学生にこんなことを言われました」と話をすると、「なにをいまさら。ずっと寝ぐせみたいだと思ってた」と言われました。そうか。そうだったのか。私の髪型は「清志郎」ではなく、「寝ぐせ」で「爆発博士」だったのか。いままで「寝ぐせ」で結婚式に出席したり「爆発博士」として面接をしたり／うけたりしていたとは。愕然としたまま日々を過ごしているうちまた「いい意味で」荒々しくなってきました。そうだ。そう考えよう。そうすれば大丈夫だろうから。

浦田雅夫

芸大を出た保育士がいろいろな対人援助の場で活躍してくれています。保育所、児童館、障がい者施設ほか。

人を支える中で、創造性は必要不可欠であると思います。こちらにも負けじと創造性を育まねばと思っていますが。。。

中村 正

大学の講義がないこの時期はこのマガジンも含めていくつかのたまった原稿や

本にするための原稿を書く時間としているが、そういう時にかぎって読書をしたくなる。少し原稿を書いてはご褒美にと小説に手が出る。映画や演劇も同じように観に行きたくなる。レンタルDVDはいつものことで家の近くにあるのでついついでかけてしまう。

この2月には連れ合いがアラブ首長国連邦に単身赴任をし、子どもも自由な時間と戯れているので、当然のようにひとりになる時間もでき、よけいにこうした趣味に走ってしまうことになる。一種の逃避だろう。映画化されておもしろかったので『きいろいゾウ』をはじめとした西加奈子さんの作品（『ふくわらい』が一番よかった）、若い世代の感受性が光る朝井リョウさんの『何者』、『チア男子!!』、いじめを描いたいくつかの作品（奥田英朗さんの『沈黙の町で』、宮部みゆきさん『ソロモンの偽証』、川上未映子さんの『ヘブン』など）を次々と読んでいる。さらに読もうと思いついたのは百田尚樹さんの『海賊と呼ばれた男』をはじめとした人物列伝もの。男らしい作品が多い。朝井さんの軽快で現代的な男性像とは対比的である。さらにSF物も捨てがたい。伊藤計劃・円城塔さんの『屍者の帝国』も生きているとは何かを考えさせられた。

こうして列記するとなんだか一貫性がないなと思う。でも共通していることもある。私は病跡学とか臨床文学が好きなので、小説、演劇、音楽等が多様に影、狂、悪、憎、怒、哀等を描いてくれることを期待しているし、そうしたものを描写するにこれらの文化形象はとてもよいと思っている。どんどんとはまっていきたいが、肝心の原稿が書けなくなると編集長から催促のメールが入るので、「禁欲！、禁欲！」と自分にいい聞かせている。

まだまだあるがこうして活字にはまっているので目によいはずはなく、先日、女性職員たちが流行のPCメガネを買うというので大丸まで一緒に買いに行った。パソコンを長く使う時には確かに目が疲れな感じはする。しかしそれでまたパソコンに向かう時間が長くなると結局何のためかわからない。みなさんもお試しあれ。



サトウタツヤ

このごろ2ヶ月に一度のペースで福島を訪問している。授業でも福島のことをとりあげることが多い。学生たちに川柳をつくってもらったので、それを紹介してみよう。

福島の情報知らず 恥を知る
生の声 大事にしたい これからは

わかっている しかし買えない ジレンマよ
支援したい けれども怖さが ぬぐえない

風評に 騙られていた 2年間
福島の 食材食べて 貢献を

福島に 私の気持ち 伝えたい
フクシマを 私たちの手で 福島に

大震災から2年。復興はこれから。

大野 睦

もうすぐそこまで春が来ている、と感じる暖かな日々。桜も咲き始めました。今年屋久島が世界自然遺産登録されて20周年。どんな一年になるのやら、春の陽射しのように穏やかに過ごしたいと思うところです。

ネイチャーガイド 有限会社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

坊 隆史

最近忙しい。忙しいのはここしばらくのことだと思っていたが、「君の生き方はずっと忙しい生活をしている」と師匠に指摘された。よくよく思い返せば、学生時代からアルバイトを掛け持ちしたり、夜通し遊

んでいたりしていた。いわゆるタイプ A の生き方で、もっとスローな生活を心がけないといけないと内省を得た。たまには自分に向き合う作業が必要ですね。

松本 健輔

カウンセリングルーム HummingBird 主宰

<http://www.hummingbird-cr.com>

「先生、これって何か役に立つの??」

一年間生徒のこの質問と戦ってきた。昨年四月からお願いされている専門学校の心理学の授業が2月で終わった。必死で毎回授業の内容を考え、気が重くなりながら学校に向かい、達成感を感じる帰り道。それを一年間終えて、結果何か生徒に伝えられたかという疑問だけど、生徒の質問に答えて、生徒の話聞いたことがすごく勉強になったと思う。今年の生徒には悪いけど、来年この得たものを生徒に返さなければ!!

それにしても週一でこんなに疲れるのに毎日教えている本業の先生はほんとうにすごいと改めて実感。



岡崎 正明

たまたまテレビを観ていたらこんな話が紹介されていた。夏目漱石が英語教師をしていた時のこと。ある女学生から「先生、『I love you』の訳は『我君を愛す』でよいでしょうか」と聞かれ、こう答えたという。「そうですね。『月がきれいですね』と言いなさい。それで伝わります」

かっ。カッコええなあ漱石は。思わずテレビに向かってそう叫んでいた。

私も言葉を道具に仕事している者のはしくれ。言葉の選択には配慮してきたつもりだし、自分なりのこだわりもある。だが漱

石には脱帽。よう思いつきません。さすがお札になる人は違うなあ。

言葉なんてしょせん道具だし、限界がある。言葉で伝えられないものもたくさんある。もちろんその前提は大事だと思う。

でも、それでもやはり言葉の持つかって偉大だ。漱石ほどオシャレでなくとも、シンプルな「ありがとう」「あなたのせいじゃないよ」なんて言葉で救われることが世の中たくさんある。

最近心に残ったとてもシンプルな言葉。それはある作品展で見かけた特別支援学校の生徒共同制作品。1月から12月まで、その月毎のイメージの絵と俳句を組み合わせた「俳句カレンダー」だった。素朴な絵やえらい字余りな句に交じって、11月のところにこんな句があった。

「さむいから 毛布をかけて あげようか」

日常にある普通の言葉。なのになんたか胸が温かくなった。思わず「これ好きだなあ」とつぶやいていた。自然に笑顔になっていた。

自分もこんな風に言葉を使いたいと思った。

牛若 孝治

「失礼ですが、いつから目が不自由になったんですか?」この質問はいやというほど受ける。私はこの手の質問が大嫌いである。そこで、相手とだいたい次のような会話になる。

私:「なぜそんなこと聞くんですか?」

相手:「ごめんなさい。聞いてはいけなかったんですね」

私:「聞いてはいけないというより、目が不自由であるということが、なぜ「失礼」なのですか?」

相手:「そうですね」

私:「実は、そういう質問をしているあなた自身が「失礼」なんです。つまり、目が見えて、耳が聞こえて、自由に物を話せて、歩いたり、走ったりできることが「当たり前」だと、心のどこかで思っていますか?」

相手のことを慮って言っているような言い回しが、ときに相手を不快にさせているという認識を持つことが必要だ。そこで私

はこの手の質問をした人に対しては、最終的に次のように答える。「そんなこと、あなたに教える権利はありません」

袴田 洋子

自分のダメぶりを振り返る連載「援助職のリカバリー」を書いていると、ほんとうに情けなくなります。どうしてこんなにもダメな自分なんだろうと思えてきて、嫌になります。が、こうやって振り返ることで自分をよく見ている、だから、修正できると思うわけですが、また失敗をしてしまうのです。

振り返っているのに、なぜ失敗をするのか? 理由は、ちゃんと対策を立てないからだと思います。「次からは、〇〇のようにする」と決めていないから、また同じ事をやっちゃうのです。

ここまで明らかにさせないと、行動って変える事ができないんだなあ、最近、しみじみ思っています。本当に不器用な自分です。でも、生きています。

乾 明紀

禪宗から一転して浄土真宗とのご縁を書くことになった。自らは「自力」の聖道門に生き、「他力」の浄土門の精神で他者に接する人でありたい思いつつも、「自力」の力が弱く原稿の提出が遅れてご迷惑をかけてしまった。団先生、千葉さん、いつもごめんなさい…。でも、言い訳させてください。インフルエンザ A 型に罹患したのです。10月に予防接種を受けたのですが、医師曰く、2月になると抗体の力が弱ってくるそうです。今年の冬は一回も風邪をひかなかったことが自慢だったのにインフルエンザになるなんて、悔しい〜。

國友 万裕

僕は、いくつかの大学と専門学校の非常勤講師として教えてきたのですが、いよいよ教歴20年になります。そして、今年度をもって、専門学校の方は辞退することになります。大学の仕事が増えたため、専門学校まで行っているゆとりがなくなってしまうからですが、9年間、教えました。ちょうど40歳の頃から教え始めたのですが、大学とは勝手が違い、楽しいことと、

つらいことが交錯する9年間でした。

専門学校は、大学とは違い、規模が小さいため、「先生、先生」と学生たちから慕ってもらえます。嬉しいのはその部分でした。女子学生だと多少の距離をおかざるを得ませんが、男子学生たちとはスキップ的なつきあいとなるので、若い頃を取り戻したような気持ちで、本当に貴重な経験をさせてもらえました。2年前だったか、専門学校を途中でやめて、東京に就職した男性学生とは埼玉で会って、一緒に飯を食って、お風呂に入りました。「俺、こんなことしたの、先生だけです」と楽しそうに言ってくれました。今でもFACEBOOKのお友達です。

その一方で、専門学校の場合は、気に食わないことがあると、クレームはつけられるし、教務に言いつけにいかれるし、エネルギーを消耗することも事実でした。他の先生たちは、予備校や塾で教えていた経験が長い人たちなので、教える技術という部分では僕よりもはるかに上です。僕は面白い系の先生でどうにかカバーしてきたんだけど、編入や資格試験対策などの具体的な目標をもった学生たちですから、「面白い、話しやすい」というだけでは、存在価値を認めてくれません。相当、きついクレームが来て、凹んだことも度々でした。

しかし、この9年間、どうにか仕事を全うしました。大仕事を終えた気持ちです。これからは大学の仕事ばかりになるので、もうクレームはそうそう来なくなるでしょうが、その分、若い子に慕ってもらえることも、そうそうなくなるでしょうねー。まだ今の時点で彼らは僕が辞めることを知らないはずですが、今年卒業する男の子たちから、「春休みに、一緒にジムで汗を流して、その後、先生のおごりで飯を食べましょうよ」と誘われました。「いいよ。ただ3人くらいにしておいてくれないと何人もおごることはできないからね(笑)」と答えました。

本当に誘ってくるかな？ 誘って来てくれたら、喜んで付き合うつもりです。でも、僕の方からは立場上誘えない。セクハラの噂を立てられたのでは困ります(笑)。

それに、若い子たちだから、今は誘う気分でも、気が変わったり、忘れてたりで、誘ってこなくなる可能性は大いにあるんですね。それは僕も十分わかっています。誘ってこなくても、僕のことを嫌いになったという意味ではないことは確かです。一緒にジムや飯に行けたら楽しいだろうけど、誘ってこなくても凹むことはありません。さあ、誘ってくるかな？ 神様にお任せです。

脇野千恵

★ようやく春が来たと思うこのごろです。先日久しぶりに和歌山に出かけることがあり、紀三井寺に参拝しました。日曜日でしたが、参拝者もほとんどなく、静かなお寺でした。

庭の一角にソメイヨシノの桜の木を見つけました。その木は、近畿で気象観測上の春到来を決める基本となるものでした。まだまだ蕾もかたく、この花が開くことで本格的な春が来たと言われるのだと思うと、ちょっと感慨深いものがありました。

共に行った友人は昔の参道はとも賑わっていたと言います。しかし、ほとんどの店は日曜なのに閉まったままでした。時代と共に町の風景も変わっていくものだなと思いました。

団 士郎

月刊誌e d uの新連載が始まった。見開き2ページで、「家族の風景」と題したものだ。持論のままに、時には読者の予定調和に水を差すような家族話を書いてゆこうと思う。

月刊「学校教育相談」には『木陰の物語』を去年から連載中だ。一年目は、今まで書いたモノの中から編集者が選んだラインナップだった。さて、今年はどうするのか？

教育問題に格別大上段からの主張があるわけではない。家族の姿がいちばんよく表れると思っているだけだ。子育てのことになる、その人の正体が見えやすい。言ってることと、我が子にしていることの違う人にはよく出会った。そういうところに、チョッ

トもの申している感じだ。

我が家の子育てはとっくに終了しているし、孫に関しては親がやることだから、私は無関係だ。渦中にいない者の言うことなど、聞く耳を持たねばならないかどうかも、おそらく疑問はあると思う。まあ、物事には結果が出るから、要するにそこだ。

家族療学会誌には「連想映画館」と題したものを、もう7年も連載している。映画好きとしては唯一、格別な使命感もなく、映画、家族、旅など好きなものを絡めて自由に書いている。いつか一冊の本になると良いのだが。

ローカルなミニコミ誌「はなかみ通信」やNPOニュースレターにも連載がある。

関東中心の幼稚園の園便りの連載は30誌を超える。

そして本誌連載と編集、更に、家族心理学会のニュースレター編集と執筆をしている。

原稿料のいただけるものからタダのもの（こっちが多いが）まで、書きたいものを選んで書いているつもりだ。「書く、描く、話す」がバランスよく展開できているので不満はない。

